

構想力の論理 : ライプニッツとカントの空間記述の概念

UZAWA, Kazuhiko / 鵜澤, 和彦

(出版者 / Publisher)

法政哲学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

Bulletin of Hosei Society for Philosophy / 法政哲学

(巻 / Volume)

10

(開始ページ / Start Page)

1

(終了ページ / End Page)

13

(発行年 / Year)

2014-03

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00009884>

構想力の論理

——ライプニッツとカントの空間記述の概念——

鵜 澤 和 彦

はじめに

「構想力」あるいは「想像力」と訳される単語 Einbildungskraft は、その語源から意味を捉えるならば、「心の中に」(Ein-)「像を形成する」(Bildungs-)「力」(Kraft)を言い表している。そして、この語源に由来する含意は、この概念の理解を根本的に方向づけている。たとえば、ハイデッガー^②は、構想力の概念を説明する際にきまって「心象へと持ち来らず」という表現から出発する。さらに興味深いのは、カントの思想的先駆者であるライプニッツである。彼はラテン語やフランス語で多数の論文、書簡、著書を書き残したにもかかわらず、その心象や構想力の概念に

は、表象像を形成する働き、すなわち、ドイツの思想的伝統が色濃く反映している。このことはまた、カントの『純粹理性批判』からも読み取ることができる。なぜなら、その第二版の演繹論の特徴は「空間の記述としての運動」(B155)、すなわち、構想力の「形態的綜合」の概念にあるからである。

このように構想力の本質的な特徴をなす空間記述は、どのような哲学的文脈の中で捉えられるのか、そして、今日的な観点から見て、どういった意義と役割を持つのだろうか。本稿のテーマは、こうした問題設定からカントの生産的構想力による空間記述の概念をライプニッツとの関連で明らかにすることである。そして、両哲学者の構想力の概念に関する共通点と相違点を踏まえながら、その差異

の現代的意義を論じることを見論文の結論とした。

ここで論文の章構成について述べておくならば、第一章でライプニッツの普遍数学と知覚論から構想力の概念を分析し、第二章ではカントの演繹論から構想力の概念を把握する。第三章では、両者の共通点と相違点を踏まえたいうえで、両者の概念の相違が持つ現代的意義に言及する。表題の「構想力の論理」は、三木清の著作からとられたものであるが、彼自身が推測しているように、もともとはライプニッツの思想にあつたものである。それゆえ、この表題は、バロックから近代を経て現代に至る構想力論の系譜を最もよく表現するものと考えられる。

一 ライプニッツの構想力論

一 一 普遍数学

ライプニッツは、『結合術の普遍学への応用』（一六八三年）^④という論文で「論理学は普遍学、数学は構想力の産物に関する学、形而上学は知性の産物に関する学、道徳学は感情の学である」と諸学を位置づけている。興味深いのは、数学が構想力との関連で定義されている点である。同年に書かれたとされる『新普遍数学原論』（新原論と略記）^⑤では、数学と構想力の関連は、以下のように説明されている。

「この普遍数学の諸原理は、これまで知られていた記号計算法とは著しく異なっており、その相違は、ヴィエトやデカルトの記号計算などとその先行者の記号術との違い以上のものがある。（中略）

総合と分析とが、すなわち結合法と代数学との双方が扱われる。

普遍数学は構想力の対象となるものによって、あるものを正確に規定する方法を扱うべきである。すなわち、いわば構想力の論理学 (logico-imaginatio) を扱うべきである。したがって、思考や行為のような純粋に知的な事柄に関する形而上学は除外されている。そして、数、位置、運動に関する特殊数学も念頭におかれてはいない。

構想力は、一般的に質 (qualitas) と量 (quantitas) という二つの事柄、すなわち、大きさ (magnitudo) と形 (forma) に関わる。そして、それらによって、事物が相似しているとか相似していない、合同であるとか合同でないと呼ばれる。相似の考察は普遍数学に属するということも明らかである。ましてや、幾何学のような特殊数学がしばしば諸図形の相似を探究するという事実を顧慮するならば、合同の考察が普遍数学に属することは明白なのである。」（以下略）^⑥

このように新原論は、論理学に基礎をおく普遍現象学として、構想力の概念に重要な役割を与えている。すなわち、現象の量と質を把握し、それぞれを一定の諸関係へと綜合する他、逆に綜合されたものをその諸要素へと分析する働きをこの能力に認めているのである。ここで連続量（大きさ）を例に挙げて、構想力の働きを説明してみよう。構想力は、空間（座標）上の諸点の位置関係を把握し、複数の図形を描出する。さらに、図形間の諸関係（相似や合同）を扱う演算記号とアルゴリズム（演算手順）を用いて空間の諸関係を代数（記号）へと変換し、幾何学的計算を行う。これが「結合術」(ars combinatoria) と呼ばれる方法である。この方法を用いることによって、空間の諸関係は図示され、まとめられ、秩序付けられ、そして、論理学の同一律と矛盾律によって基礎づけられる。構想力による図形描出は、新原論に先立つ『幾何学的記号法』（一六七九年）という論文では「作図」(construiones lineares)、あるいは、「図示的綜合」(linea synthesis) と呼ばれ、代数による演算は「代数的綜合」(algebraica synthesis) と称されている。

や秩序を発見しやすくする。そして、この諸関係の代数計算を通じて、複雑な図形の問題を解くことを可能にする。これが「発見術」(ars inveniendi) と呼ばれる方法である。もちろん、構想力のみで全て事足りるわけではない。たとえば、空間の諸関係に数的な秩序を洞察したり、図形の相似と合同を把握するためには、より高次の認識能力である「精神」¹⁰ や「理性」あるいは「悟性」の働きが不可欠である。ただし、精神も可感的記号である代数を使用する限り、記号の表示能力としての構想力を必要とせざるを得ない。したがって、高次の認識能力と構想力は、代数的綜合や分析において不可分に結びついている。

以上から普遍数学における構想力の概念は、以下のようにまとめられる。すなわち、構想力は(一)空間の位置関係を捉える「感性的把握」、(二)諸部分から全体へと前進する「綜合」、(三)全体から諸部分へと背進する「分析」、(四)代数という可感的記号の「表示」の能力として理解することができる。このように構想力は、綜合と分析の二つの道を通じて、現象の量一般と代数（記号）との間を自在に往復することができる。ライプニッツは、この理念が実現するのであれば「所与から理性によって獲得され得るものはすべて、算術や幾何学の問題を解くのと同じように、一種の計算によって発見されるようになる」と述べている。

一 一 一 知覚論

ライプニッツのテキストにしばしば登場する「遠近法」(透視図法)の概念は、私の理解が正しければ、数学的に形式化された知覚論である。この理論は、空間における知覚の構造を説明しうる限りで、超越論的哲学の考え方に通じるものがある。ライプニッツは、射影幾何学をモデルにして、知覚像とその対象との一対一の写像関係を説明し、さらにこの幾何学を基礎とする遠近法(透視図法)によって、空間内の形態描出を基礎づける。

ライプニッツは、知性論の中でフランスの建築家・数学者デザルグの名前を挙げて(GP V 122)、対象の影に関する問題を論じている。デザルグの定理とは「二つの三角形、 ABC と $A'B'C'$ について、 AA' と BB' と CC' を結ぶ直線 h 、 i 、 j が一点 O で交わる時、直線 AB と直線 $A'B'$ 、直線 BC と直線 $B'C'$ 、直線 CA と直線 $C'A'$ の交点をそれぞれ L 、 M 、 N とすると、 L 、 M 、 N は、直線 k 上にある」というものである(図を参照)。この場合、 ABC と $A'B'C'$ は一対一の写像関係にあり、一方が他方の像あるいは射影と理解することができる。たとえば、 O を光源とすれば、 ABC は $A'B'C'$ の影として数学的に構成される。

この射影幾何学の定理は、同時に円錐曲線の理論を含ん

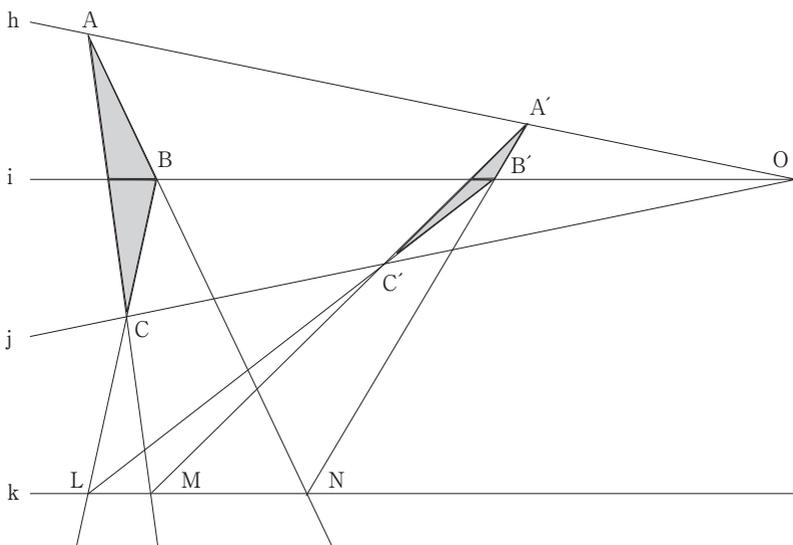


図 1

でいる。すなわち、 O を頂点とし、 ABC あるいは $A'B'C'$ に接する円錐を描くことができる。そして、この円錐を様々な角度から切断すれば、円、楕円、放物線が構成される。たとえば、円錐を底面に水平に切断すれば、その面は円となるが、斜めに切断すれば、楕円や放物線が得られる。これらの円錐曲線は、互いの曲線の像ないしは射影として把握される。

ライブニッツが円錐曲線について論じる理由は、円錐が我々の視界を説明する遠近法の原理、すなわち、視円錐に他ならないからである。この視円錐から一点透視図法、二点および三点透視図法を説明することができる。一点透視図法とは、すべての消尽線が一つの消尽点に収束する遠近法であり、二点透視図法は、消尽線と消尽点が二組存在する場合である。たとえば、ある対象を斜め横から見ると、二点透視図法が適用される。さらに、ある対象を斜め上から見ると、消尽線と消尽点は三組存在することになるが、この場合の遠近法が三点透視図法と呼ばれる。

ここでデザルグの定理に戻って、心象と対象との関係を確認しておく。 O をモナド（形而上学点）、 A, B, C を知覚像、 A', B', C' をその対象に置き換えるならば、図1は知覚像と対象との一対一の写像関係を表している。ライブニッツは『普通学・記号論』で、この写像関係を次のように説

明している。すなわち、遠近法の中で捉えられる対象は、作業仮説的な心のスクリーン上に描出される。その際、私たちの眼は、消尽線がそこから放射線状にひかれる中心点（光源）に相当する。そして、これらの消尽線は、心象の外縁に接し、さらに実在的な対象の対応点（現象点）に達する。したがって、知覚像という現象は、心のスクリーン上の位置関係として、消尽線とその現象点によって構成されるのである（vgl. GP VII 169）。これが空間における形態描出の形相的原理である。

この遠近法を成立させているものは、消尽点を定立し、消尽線を描く構想力の働きとその働きを数学的に規定しているデザルグの定理である。消尽点と消尽線は、実在するリアルな点や実線ではない。それは、いわば構想力が視覚野に描出する一種の虚構に他ならない。しかし、この虚構を通じて、我々の視覚野は視円錐の底面として構成され、一つの定理によって数学的に記述されることになる。このように見てくると、ライブニッツの知覚論は、普通数学の章で考察したように、徹頭徹尾数学的に形式化されている。ライブニッツの空間記述の概念は(一)構想力が色彩や触覚の同一性を基準にして知覚像を描くという実質的原理、そして(二)構想力が消尽点と消尽線を介して対象の知覚像を描出するという形相的原理の二つにまとめられる。これらの

原理は、経験の対象の形態を描出する際に協同して働く。すなわち、経験の対象の形態は、先ず感覚質の同一性を基準にして構成され、次に遠近法によって空間内に位置づけられ、立体的に描出される。その際、モナドが知覚するのは、あくまでも対象の一つのアスペクト（側面）、すなわち「現象」にすぎない。しかし、このアスペクトは、同時にモナドが対象を多元的に知覚できることの証でもある。

知覚論での構想力は、多様を一つに「総合」する役割を担っている。それは、モナドの表出作用を意味しており、世界を多元的に表象する能動的かつ観念的な働きである。この観点から、ライプニッツは、新知性論の中で暗喩を用いてロックの経験論的な知覚論を次のように批判している (Nouveaux Essais, GP V, 122)。鏡の前で吠えている犬は、鏡の中の犬の姿が、実は自分自身の姿であることに気が付いていない。経験論者は、鏡の中の犬が吠えている犬から独立した存在であり、前者が後者の心象を生み出す原因であると考える。しかし、鏡の中の犬は、表象を生み出す原因ではなく、その犬自らが自分を映し出した結果に他ならない。ここから、ライプニッツは、ロックの知覚論が原因と結果を取り違えていると論駁する。さらに、この暗喩に続けてその論拠を次のように付け加えている。「なぜなら、我々が本来見ているものは心象にすぎず、そして、光の放

射に出会っているにすぎないからである」(ibid.)。

二 カントの構想力論

カテゴリーの演繹とは、現象に対するカテゴリーの客観的妥当性を基礎づけることである。第二版の演繹論は(一)「直観における把握の総合」、(二)「構想における再生産の総合」、(三)「概念における再認の総合」という三段の総合から成り立っている。この最初の二つの総合は、感性的認識としての知覚の形成に対応する。これに続く第三の総合は、カテゴリーによる「再認」(Rekognition)と呼ばれている。この表現から、知覚という仕方で第一次の感性的認知が既に成立していることが読み取れる。そして、この知覚にカテゴリーの働きが加わることで、対象の認識が「判断」という仕方で成立するとされている。すなわち、第一版では知覚と判断のレベルが明確に区別されているのである。

これに対し、第二版の演繹論は全く異なる論証方法を用いている。すなわち、カテゴリーが既に(一)の把握の総合の条件であることを指摘し、第一版で三段階に分けていた総合を「形態的総合」という概念で一挙に説明しようとする。

「したがって、多様なものが我々の内から、あるいは、

外から由来するものであっても、多様なものの総合的統一すら、したがって、また結合も（中略）アプリアオリにあらゆる把握の総合の条件として既にこれらの諸直観と共に諸直観においてではなく同時に与えられている。」

(B161)

興味深いのは、カテゴリーが既に「あらゆる把握の総合の条件として」考えられていることである。このあらゆる把握とは、我々の内から産出される純粹直感のアプリアオリな多様、そして、我々の外から経験的に獲得される感性的直観の多様という二種類の多様を把握することを意味している。カテゴリーが経験的な多様の把握の条件であるとすれば、知覚ですらカテゴリーに従わざるを得なくなる (vgl. ibid. B164f.)。言い換えれば、我々が対象の知覚像を通じて対象を認識する限り、我々はその都度カテゴリーの客観的実在性を確認していることになる。これに続けて、カントは、家を例に挙げて経験的直観の対象の形態描出を説明している。

「したがって、たとえば、ある家の経験的直観をその直観の多様なものの把握によって知覚にもたらずならば、空間と外的な感性的直観一般の必然的統一が私の根

底にある。そして、私は、空間における多様なものの総合的統一に従って、いわば家の形態を描くのである。」

(B162)

この引用に登場する空間は「人が実際に幾何学で必要とするように、対象として表象された空間」(B160)を意味している。この空間とは、視覚的比喩を用いれば、作業仮説的な心のスクリーン、あるいは、思想上のキャンバスのことである。この空間は、図式論では「外官の前のあらゆる大きさ（外延量）の純粹な像」(B182)とも呼ばれている。全ての外延量の「純粹な像」(das reine Bild)とは、一切の経験的な要素を含むことのない、思想上の空間を意味している。カントが語る「純粹直感のアプリアオリな多様」とは、この思想空間で産出される幾何学的図形やその要素のことである。この空間は「直観の多様なものを受容する「直観の形式」(Form der Anschauung)の他」(「感性的形式によって与えられた多様なものを一つの直観的表象へと包括すること」、すなわち「形式的直観」(formale Anschauung)をも含む)とされる (vgl. B160f.)。直観の形式は、並存（空間）や継起（時間）という仕方で多様なものを受容する感性的形式である。それは受動的な作用を特徴とし、また、決して対象として表象することが

できないものである。これに対し、形式的直観は、悟性のカテゴリーに淵源する能動的・自発的綜合にその特色がある。そして、この形式的直観によって、幾何学的図形や対象の形象が思想上の空間に描出されるのである。

この場合、思想空間とそこで描かれる形象は、前者が存在しなければ、後者も描出されないため、必然的に結びついている。「空間と外的な感性的直観一般の必然的統一」とは、この両者の不可分の関係を言い表している。構想力は、この思想上の空間で「同種的なものの綜合のカテゴリー、すなわち 量のカテゴリー」(B162)に従って把握の綜合を行い、対象の空間的延長と形態を描出する。この場合、知覚の形成が同時に認識(判断)の成立となり、その意味で構想力と悟性には「同一の自発性」(B163)が帰せられる。この対象の形態描出には、二つの重要な含意がある。第一の論点は、形態描出の認識論的意義である。対象の形態描出による「表象の統一」(B160)は、対象の思考や認識の条件に他ならない。我々は心の中で対象の形を描くことによって、その対象がどのようなものであるかをはじめて概念的に把握することができる。その対象が経験的な対象であっても、あるいは、純粹直感の対象である幾何学的な図形であっても、およそ対象と呼ばれるものは延長と形象、すなわち表象の統一を備えていなければならない。

この表象の統一が成立しなければ、その対象を概念的に把握することは不可能になる。

「我々は思想の内で直線を引くことがなければ、いかなる直線も考えることができない。また、円を描くことがなければ、どのような円も考えることができない。そして、同じ点から三本の直線を互いに直角に交差させることがなければ、空間の三次元も表象することができない。」(B154)

直線、円、空間の三次元という実例は、いずれも純粹直感の対象となる幾何学的図形である。しかし、表象の統一は、経験的直観の対象に関してもあてはまる。たとえば、我々が「家」(B162)を認識する場合、その対象の形からそれを家と判断している。もし、その形が家とは異なるものであれば、その対象を家と判断することはありえない。この場合、経験的直観の多様は、先ず直観の形式を通じて受容され、次に形式的直観によって一つの家の形象へと取りまとめられる。このようにして成立した表象の統一は、その対象に関する思考や認識を可能にする条件に他ならない。すなわち「(対象の形態描出)によつてはじめて、ある客観(規定された空間)が認識される」(B138)のである。

第二の論点は、形態描出の象徴的・記号論的意義である。カントは、思想空間上で直線を引く議論を援用して、悟性による内官の触発（自己触発）の構造を説明している。この説明には、カントの優れた記号論的思考が垣間見れる。我々は、どのようにしても時間そのものを表象することができない。なぜなら、時間は空間的延長を持たないからである。そのため、悟性（統覚）が内官の形式である時間を規定して、カテゴリーの結合を感性に持ち来らすとしても、それを具体的にイメージすることができないのである。そこで、カントが採用した方法は、思想の中で直線を引くという行為を時間の継起を表示する記号として用いることである。この方法の利点は、直線の描出が心象として对象的に描かれるため、そのイメージを利用して直線を引くという働きそのものに「注意」(B157)が向けられることである。この方法を用いれば、直線の長さや位置は「時間の長さ」(B156)や「時間位置」(B156)に翻訳されて理解されることになる。

たとえば、我々は心の中で、ある一定の方向（ベクトル）に直線を引く場合、その方向は未来、既に描出した部分は過去、そして、まさに描いている時点は現在を表示することになる。また、直線の描出の際に一定の間隔で点を描くことで単位を定立し、さらにそれらを総合することで、直

線の長さを定めることができる。この単位をその都度定立することは外延量の産出であり、その長さを定めることは個々の外延量の総合を意味する。

この外延量の継起的総合を時間に置き換えてみよう。感性のすべての諸表象は、内官の形式としての時間によって、ある種の系列のように順番に意識される。空間表象も感性の表象である限り、この時間形式に服することになる。悟性は、内官のそれぞれの表象にその都度その時間位置を定め、同種のものとの総合の規則である量のカテゴリーによって、表象の時間位置の一つ一つを総合して時間の長さ（数量）を規定する。これが「内官をその形式に従って規定する」(B155)ことに他ならない。このように、悟性は、内官の表象の系列に概念の秩序、すなわち、カテゴリーの結合をもたらす。図式論や原則論の表現を用いれば、この総合は「直観の把握において時間そのものを産出する」(A143/B182)こと、あるいは「把握における（部分から部分への）継起的総合」(A163/B204)に他ならない。

以上の考察を踏まえて、演繹論での構想力の概念を整理しておこう。先ず(一)構想力は「たとえ対象が現存しなくてもその対象を表象する能力」(B151)とされている。これはアリストテレスに由来する伝統的な定義である。ここでは想起、記憶、再生産といったことが考えられている。

さらに(二)構想力は「感性的直観の多様を綜合する」(B151) 能力として捉えられている。この綜合は、感性的直観の多様にかかわるのであれば、「形態的綜合」(synthesis speciosa)と呼ばれている。「形態的」という形容が付けられている理由は、多様の綜合が対象の空間的延長と形象を生み出すからである。そして、この形態的綜合が統覚の綜合的統一の働きを担う場合、すなわち、カテゴリーが示す結合によって行われる場合は、その綜合は「構想力の超越論的綜合」(B151)と称される。この「超越論的」という形容は、悟性がカテゴリーによって感性的直観の多様を綜合し、対象認識を成立させることから付けられたものである。演繹論、特に自己触発の議論は、まさにこの概念に依拠している。そして、この超越論的綜合が、幾何学と超越論的哲学の基礎をなす「空間の記述の運動」(B151)に他ならない。これに対し「悟性結合」(synthesis intellectualis)は、単なるカテゴリーが示す概念結合とされ、前者から本質的に区別されている。

三 構想力の論理

二人の哲学者の共通点は、先ず(一)構想力を「綜合」の能力と捉えていることである。構想力が多様なものを綜合

統一するという点に関しては、二人の哲学者の間に相違はない。次に(二)二人とも構想力を「感性」と理解する一方で、対象の概念規定の際には、構想力を高度の認識能力と同一視している。さらに(三)構想力の働きを説明する際に「操作概念」(Operativer Begriff)を用いている。操作概念とは、問題とされている「主題概念」(Thematischer Begriff)が对象的に把握できない場合、理論的な操作を加えて、その概念を分析の対象にするための概念の「媒体」(Medium)のことである。それは、何事かを自己主張するものではなく、譬えて言えば、舞台の黒子に徹するような概念である。すなわち、ライブニッツの操作概念とは、デザルグの定理、消尽点と消尽線などである。そして、カントのそれは、純粹直感のアプリオリな多様である。これらの概念は、実在する点や線ではなく、構想力が概念的な秩序を生み出すためにアプリオリに描出するものである。

主要な相違点については(一)ライブニッツの構想力は、綜合と分析の二つの道を通じて、現象の量一般と代数(記号)との間を自在に往復することができることである。しかし、カントの構想力は、感覺質を記号に変換するようなことは意図していない。この相違の背景には、直観と概念及び感性と悟性の区別を連続的に捉えるか、あるいは、これらの間に越えられない断絶を見るかの対立がある。前者がライ

プニッツ、後者がカントの立場である。次に(二)ライブニッツは論理学が数学の基礎であると考え、公理主義の立場をとる。しかし、カントは構想力による概念の「構成」を重視する直観主義の立場に立っている。そして(三)ライブニッツは、実体よりも関係を重視し、数学的な秩序や形式を重んじる。しかし、カントは、感性的概念の図式としてのモノグラム¹⁵の概念を考えていることから、やはり経験認識の場面で実体概念を重視していることが伺える。

ライブニッツの構想力は、いわば感覚質と代数(記号)をつなぐインターフェース(データのやり取りをする手順や方法)であり、前者から後者へ、あるいは、後者から前者へのコード変換を可能にする。それは今日、我々の技術文明の中で半ば実現され、実用的な目的に使用されている。たとえば、医療の現場で使われるMRI(核磁気共鳴画像法)のシステムは、身体の各部分をスキャンし、そのデジタル情報を三次元のアナログ情報として表示する。そして、がんに侵されている細胞を色分けし、その情報を放射線治療やその他の治療に役立てる。また、宇宙物理学の分野でも、スーパーコンピュータを使用して宇宙全体の構造や成り立ちを計算し、それを立体的な像として再構成している。これらのMRIの身体画像や宇宙の分布図などは、我々の知覚システムが本来捉えることができないものを表示す

る、一種のフィクションである。しかし、この虚構は、見えざるものを見えるものに変え、あるいは、その逆の手続きによって、我々の医療や科学文明を実際に前進させる力を持っている。

他方、カントの構想力は、時間図式とモノグラムによって、個別的な対象を指示する単称指示句の意味を基礎づけることができる。これは、我々が個別的な対象について単称判断を下し、その意味を語る地平を拓くことでもある。そして、この単称判断の理論は、単なる理論的な文脈を離れて、我々の日常生活の広範な領域で妥当性を見出すであろう。たとえば、中学生になる少女が三歳の時に誕生日にもらったクマのぬいぐるみを後生大事にしていると想定しよう。その少女は、このクマのぬいぐるみが一〇年の歳月を経て、自分と喜怒哀楽を分かち合ってきた存在だと感じている。すると、そのクマのぬいぐるみは、少女にとって、新しくきれいなクマのぬいぐるみと交換することのできない、かけがえないものなのである。なぜなら、そのぬいぐるみは、彼女にとって一回限りの存在として理解されているからである。同じことは、対人関係においてもそのまま当てはまる。このように、我々の構想力は、ある個別の対象に自らの生の歴史を投影し、それに固有の意味づけを行うことがある。この場合、構想力は、本論で論究した

理論的領域を離れ、美学や解釈学の次元¹⁶へと進んでいる」となる。このように、カントの構想力論は、超越論的哲学から美学や解釈学へと展開する道を示しており、また、それらの理論的基礎を提供するものでもある。

「心の中に像を形成する力」という概念を共有するライプニッツとカントは、構想力の能動的・自発的綜合というドイツの思想的伝統を分かち持っている。しかし、二人の哲学者が構想力に与えた意味と役割は、相交わることはない。ライプニッツの構想力の論理は、遠近法に見られる現象的世界の数学的構成の論理であるのに対し、カントのそれは、個別の対象の描出の理論である。しかし、この相違は、今日構想力の問題を考える上で看過することのできない二つの方向性を指し示している。

【注】

- (1) Einbildungskraft は、動詞 einbilden からの派生名詞 Einbildung を名詞に作られたものである。この動詞の最も古い用例は、ドイツ神秘主義の思想家エックハルトの著作に確認できると言われている。それは（神の像を）「魂の中へと形作ること」を意味していたとされる。Hermann Paul, *Deutsches Wörterbuch, Bedeutungsgeschichte und Aufbau unseres Wortschatzes*, 10. Auflage, Tübingen 2002, S. 254.
- (2) Martin Heidegger, *Kant und das Problem der Metaphysik*, 5. Auflage, Frankfurt am Main 1991, S. 91. Vgl. Martin Heidegger, *Phänomenologische Interpretation von Kants Kritik der reinen Vernunft*, in: *Martin Heidegger Gesamtausgabe*, Band 25, Frankfurt am Main 1995, S. 415. ただし、ハイデッガーは、カントの心象概念の説明から始めているとはいっても、最終的には超越論的構想力の本質を時間の内に捉え、さらに、超越論的構想力を純粹感性和純粹悟性の「根源」(Wurzel)と解釈している。Vgl. *Kant und das Problem der Metaphysik*, S. 175f., 196, 151f., 156-60.
- (3) 三木清は、カッシーラーの研究に依拠し「構想力の論理」という言葉がバウムガルテンに由来すると説明している(六頁)。さらに、バウムガルテンの思想がライプニッツの微小知覚の概念から来しているのではないかと推測している(九九頁)。三木清著『創造する構想力』(旧題：構想力の論理) 燈影舎、京都哲学選書第一八巻。確かに「構想力の論理」という思想がライプニッツに由来するという三木の推測は正しい。しかし、それは微小知覚ではなく、「新普遍数学原論」(一六八三年)という論文で表明されている。三木は構想力の論理という概念で、理性的論理とは異なる修辭学的論理を考えている。
- (4) Gottfried Wilhelm Leibniz, *De Artis Combinatoriae Usu in Scientia Generali*, in: *Sämtliche Schriften und Briefe, Sechste Reihe, Vierter Band*, 1999 Akademie Verlag, S. 511.
- (5) Rabouin は、ライプニッツの普遍数学の様々な草稿を三つのグループに分類している。その解説の中で「新原論」の独自性を指摘してはいるものの、構想力の概念の解明は

- 今後の課題とされる。Vgl. David Rabouin, Interpretations of Leibniz's Mathesis Universalis at the Beginning of the XXth Century, in: R. Krömer and Z.C. -drian (ed.), *New Essay in Leibniz Reception*, Basel 2012, S. 197, S. 199.
- (6) Gottfried Wilhelm Leibniz, *Elementa Nova Matheseos Universalis*, in: *a.a.O.*, S. 513f. 翻訳にあたっては、佐々木氏の英訳と伊豆蔵氏の邦訳を参考にした。Chikara Sasaki, *Descartes's mathematical thought*, 2003 Dordrecht, S. 40ff. 伊豆蔵好美著「マテシスの理念と空間の形而上学」現代思想 一九八八年一〇月号、一一四頁。
- (7) ライプニッツは、空間を物と物との間の関係、すなわち、相対的關係と捉えるわけであり、ニュートンの絶対空間の考え方は根本的に立場を異にしている。
- (8) この演算記号とアルゴリズムは、一六七九年の『幾何学的記号法』で創案されている。
- (9) 澤口昭聿訳「幾何学的記号法」三二二頁、『ライプニッツ著作集』第一巻「論理学」(工作舎、一九九八年)所収。Gottfried Wilhelm Leibniz, *Characteristica Geometrica*, in: *Leibnizens mathematische Schriften*, Bd. 5, S. 142.
- (10) 澤口昭聿訳、同著「三二七頁。Gottfried Wilhelm Leibniz, *Characteristica Geometrica*, in: *a.a.O.*, Bd. 5, p. 147.
- (11) 伊豆蔵好美氏は、ライプニッツが可感的記号である代数を用いている点に着目している。「それ(普遍数学の核心)があくまでも可能な記号を介して実現される限り、ライプニッツにとってのマテシスは想像力の媒介なしにはありえない。マテシスが「想像力の論理学」と規定されたことの第二の意味がここにある。」伊豆蔵好美、同論文、一〇九頁。
- (12) Gottfried Wilhelm Leibniz, *De Arte Characteristica ad Pericendas Scientias Ratione Nientes*, in: *Sämtliche Schriften und Briefe*, Sechste Reihe, Vierter Band, S. 911. 伊豆蔵好美氏の翻訳を用いた。
- (13) Helmut Pape, *Perspectivity: G. W. Leibniz on the Representation of Ontological Structure*, in: *The Journal of Speculative Philosophy*, Vol. XI, No. 1, S. 14, Gerge L. Hersey, *Architecture and Geometry in the Age of the Baroque*, Chicago 2001, S. 171f.
- (14) Eugen Fink, *Operative Begriff in Husserls Phänomenologie*, in: Eugen Fink, *Nähe und Distanz*, Freiburg am Breisgau 1976, 185f.
- (15) モングラムのご概念については、以下の論文を参照。鶴澤和彦「感性的概念の図式——心象の構成と判定の原理」日本カント協会編『カントと形而上学』(理想社、二〇二二年)、一一九〜一三二頁。
- (16) 構想力の美学及び解釈学的研究については、牧野英二著『崇高の哲学 情感豊かな理性の構築にむけて』(法政大学出版局、二〇〇七年)を参照されたい。構想力の問題が「情感的理性」「情感豊かな理性」という表現で歴史的及び原理的に考察されている。

SUMMARIES

Logik der Einbildungskraft

—Der Begriff der Raumbeschreibung bei Leibniz und Kant—

Kazuhiko UZAWA

Das Anliegen dieser Arbeit ist es, den Begriff der Raumbeschreibung bei Leibniz im Zusammenhang mit dem bei Kant aufzufassen und weiter die Gemeinsamkeit und Differenz zwischen den beiden Konzeptionen zu erläutern. Dabei rückt sich der Begriff „*imaginatio*“, d. i. Einbildungskraft, in den Mittelpunkt der Betrachtung. Die Gemeinsamkeit der beiden ist das idealistische Konzept der Vorstellungskraft, das sich eindeutig von der empiristischen Abbildtheorie unterscheidet. Der Unterschied besteht jedoch im Folgenden: Die Logik der Einbildungskraft bei Leibniz zielt darauf hin, unsere Wahrnehmungs- und Erscheinungswelt völlig mathematisch zu konstruieren. Dabei spielt die projektive Geometrie bei Desargues eine hervorragende Rolle. Im Gegensatz dazu geht es bei Kant um die Darstellungstheorie einzelner Gegenstände, die auf die Konzeptionen der Ästhetik und Hermeneutik hinausläuft. Aus diesen Betrachtungen ergibt sich, dass die Differenz zwischen den beiden heute zum methodisch relevanten Ansatzpunkt zur Überlegung der Einbildungskraft werden kann.

* * *